

「しつけ」と「虐待」

不適切な親の養育態度と子どもの問題 ～保育支援における気づき～

【事例 1：保育所の検診からネグレクトの気づき】

■家族の状況

父親(43歳)は長距離運転の運送業でほとんど家にいないことが多い。母親(38歳)は近くのスーパーの店員として働いている。子どもは、中学3年の長男と小学3年の次男と4歳のA子(本児)の5人家族である。近所や親戚、知人との交流はほとんどない。

■A子の状況

A子の身長は年齢相当であるが、体格は肥満気味であった。性格は人懐っこく、担任保育士に甘えるが、同年齢の子とはあまり遊ぶ様子はない。初対面の大人にも自分から近寄っていき、なれなれしいそぶりが見られる。

人形で一人遊びをすることが多く、時々人形の取り合いで友達とけんかをするが、最終的にA子が力づくで奪い返すことが多い。19時までの延長保育を利用している。

■ネグレクトを疑ったきっかけ

保育所の歯科健診で乳歯のすべてが虫歯であった。迎えに来た母親にA子の虫歯のことを相談すると、母親はむっとした感じで「そうですか。近いうちに歯科に連れていきます」と答え、そそくさと帰って行った。

1か月経っても歯科受診している様子がないので、担任保育士はA子に「歯医者さんに行ったの?」と聞いた。すると、A子は「歯医者さんには行ってない。だって、兄ちゃんが勉強忙しいから……」と答えた。笑うとほとんど前歯がないのが見えたので、保育士が「夜、寝るときに歯を磨いているの?」と聞くと、A子は「保育園で磨いているよ」と答える。担任保育士は、生活のことも心配で、保健センターの保健師にA子の家族について相談した。

■保健師の家庭訪問時の状況

家の中は衣類があっちこちに置かれ、空の弁当容器が台所に積まれている。台所の下にはビールの空き缶が転がっている。父親は、月に2、3度帰宅する程度で訪問時は不在であった。母親との面接は、母親の休みがとれた午後3時であったが、とても疲れている様子が伺われた。

保健師と母の面接中にA子が「どこからきたの?」と保健師に近寄ってくるが、母親が「あっちに行ってなさい」とA子を叱責する場面が多々あった。

食事について保健師が質問すると夕食は、ほとんど近くのコンビニで出来あいのお弁当を買って済ますことが多く、食べる時間はそれぞれ異なるので家族一緒に食べることはな

い。A子は好き嫌いが多く、ほとんど弁当より菓子パンで済ますことが多い。

また、母親は「現在、高校受験を控えている長男がいるのでA子にはほとんどかまっていられないし、A子はテレビを見ながら寝るので何時に寝ているのかわからない」と話す。

寝る前の歯磨きは、本人も嫌がって逃げるし、時々、長男が磨いてあげているようだ、と話す。母親はA子の虫歯について「どうせ永久歯が生えてくるから」とつぶやき、歯科受診する意思はない様子である。

次男は習い事から帰って来るなりゲームに夢中で、保健師に関心も示さない。A子もアニメを観ている。

母親の心身の状態が気になった保健師は、母親のこれまでの苦労をねぎらった言葉がけをした。すると、母親は自分の親のことを話し始めた。5人きょうだいの3番目で家は貧しくいつもお腹が空いていた。実父は、アルコール中毒で叱られた理由はわからなかったが、いつも叩かれて育ってきた。実母は、父親から暴力を受け、いつもびくびく怯えながら暮らしてきたので、子どもに体罰はせず、好きなように自由に育てたいと思っている、と話す。

保健師は、台所のビールの空き缶について「ご主人がビールを飲まれているのですか」と聞くと、母親自身が毎日ビール(350ml×3本)を睡眠薬代わりに飲んでいるとのことだった。

【事例2 虐待を疑って】

■家族の状況

母親(30歳)は2年前に離婚しM君(5歳)とS君(3歳)の3人で暮らしていたが、1年前から内縁の夫(27歳)と事実上の結婚生活を送っていた。内縁の夫との間に女の子が生まれ、兄弟は女の子を可愛がった。そして兄弟は、この男性を「お父さん」と呼んでいた。母親は近くのクリーニング店で働き、内縁の夫は建設現場で働いていた。女の子が5か月になった時に3人は「ひまわり保育園」に入園した。親戚や近隣の人との交流はなかった。

■虐待の疑い

ある年の6月、担任が初めて虐待ではないかと疑いを持ったのは、M君が歩きにくそうな恰好をしていたからだった。お尻を見ると、3本も大人の指の跡がついていた。

担当保育士が「どうしたの?」と尋ねると「滑り台で転んだ!」とM君が答えた。そこへ弟のS君が保育士のそばに来て、小さな声で「お父さんが叩いた」と保育士に教えてくれた。兄のM君は弟の方を見て泣きそうな顔をしている。(きっと、保育士に話したことで親から怒られると思ったのだろう)

担任保育士は、すぐに園長、主任に報告し、誰もいないところで兄弟の全身を調べた。兄のM君は背中にタバコの火傷痕が3個あり、弟のS君のお尻にもタバコの火傷痕が2個あった。妹の体には傷跡は見当たらなかった。

そこで、日々の日誌とは別に2人の記録を残すことにした。園長をはじめとして虐待検討委員会を園内で立ち上げ、兄弟の言動に気を配ること、体を十分に観察すること、保育園送迎時は保護者の子どもに対する関わり方や表情に注意することなどを確認した。

2日後に、M君の右目が腫れあがっていたので、お迎えに来た母親に尋ねると「何度言っても言うことを聞かないので、主人が強く叱りました」と答えた。そこで、保育士は「どんなことでM君は叱られたのですか?」と聞くと、母は急に顔をこわばらせて「しつけですから構わないでください!主人が子どものことを思ってしてくれていることですから!」と顔を赤らめて興奮しながら話した。担当保育士は、母親に「家庭内のしつけですから」と強く断言されたことを検討委員会に報告し、もう少し様子を見ることとなった。

この頃から弟のS君が友だちに乱暴をするようになった。些細なことで突然怒りだしたり、部屋の隅に隠れたり、泣き出したり、以前の明るく生き生きしていたS君の行動とは違って、問題行動が頻繁にみられるようになってきた。

その都度、担任保育士はS君を優しく抱きしめながら、友だちとの関わり方など話した。落ち着いてくるまでそばにいと、S君はいつもの表情に戻る。

12月、S君は担当保育士に「お父さんがお兄ちゃんを叩いて、晩ご飯抜きだった。ぼくもいっぱい叩かれた」と訴えた。担当保育士が理由を聞くと「遊んでいたら、早く寝ろと言われて怖かった、兄ちゃんがかわいそうだった」と話す。

虐待を疑ってから半年が過ぎていた。これまでのことを虐待検討委員会で討議し、父親と話し合いの機会を持つことに決めた。

父親は約束の日時に保育園に現れた。保育士は、母親の話から激怒すると思っていたが、意外にも静かに話しを聞いてくれた。そして、父親自身の幼少時の話をしてくれた。

父親は「実父がしつけに厳しく、口答えをした時には言うことを聞かないからと木刀で殴られ、腕を骨折することもあった。そのおかげで自分は強くなったし、その時の痛みや辛さが今の生きる原動力になっている。だから自分の育児方針を変える気持ちはない」と鋭い眼光で保育士をにらみつけた。

父親の面接から1か月後、S君の右眼瞼が腫れ上がり眼瞼の淵が切れ、ウサギの目のように白目が赤く充血していた。S君に聞くと「お父さんに、言うことをきかないからと叩かれ、よろけた時にドアにぶつかった」と、涙を浮かべて話した。保育士は、S君の目の怪我が心配で眼科受診について連絡すると、母親はしぶしぶ同意した。

これまでの経過で内縁の夫の暴力がエスカレートしてきていることから、園の検討会で話し合った結果、関係機関である市役所の福祉事務所に連絡し、これまでのきょうだいの記録ノート、撮影した写真をもって児童相談所に相談した。